若林一平　著
『インターネット文化の諸相
―グローバリゼーションを生きぬく知的戦略』

（2011年、春風社）

評者：岡野　雅雄*

著者の若林一平氏は、文教大学で永く国際学部教授として情報論・国際文化論を講じてこられ、2011年以降日本国際文化学会会長を務められている。

「インターネット文化の諸相」というタイトルにも示されるように、この本は「インターネット文化」を多角的な視点、特に国際的な視点から分析するものである。この本は、以下の６部からなる。

第Ⅰ部　文化という暴力
第Ⅱ部　文化としての戦争
第Ⅲ部　市場をつくる文化
第Ⅳ部　地球をつくる文化
第Ⅴ部　知の革命
第Ⅵ部　たくらみとしての文化

第Ⅰ部から第Ⅴ部までは、それぞれ４つの章からなっており、各章は文化の諸相のひとつひとつをある角度から取り上げた論考となっている。第Ⅵ部のみ１章からなり、筆者の研究論文をふまえたものである。

この本の内容を一言で言えば、「まえがき」で筆者が述べているように、インターネット文化の最もありふれた現実から出発して、日本のインターネット文化の諸相に焦点をあてながら世界の状況についてあわせて論じることである。その目的はインターネット文化の根源を意識化することである。筆者は、「インターネット文化」を「沈黙の臓器」に喩える。物事の根本にいつも存在しており、我々が健康なうちはそれと気がつかず、自覚症状を覚えたときにはすでに病は重症であるという意味でである。「自分たちの戦略を見つけたかったら、自分たちがどのような戦略の中に組み込まれているかを認識しておく必要がある」（p.224）とあるように、筆者は我々に自覚を促す。

インターネットを単なる便利なツールとして考えていた人は、本書を手にとって大きな驚きを覚えるであろう。筆者は専門の国際情報学の視点から、「インターネットは、超大国アメリカの情報武装のための装置である」と述べる（p.237）。なぜそのように言えるかを、インターネットの起源と展開、それを取り巻く国際情勢から解説している。

インターネット文化だけにとどまらず、その周縁部の、非常に広い範囲にわたって取材した諸事象を取り上げていることも、この本の特徴のひとつである。具体的には、巻末の「参考ウェブサイト」の諸項目が、本書の内容のインデックスともなっているのに気づいたので、以下に挙げてみたい。

1. インターネット、2. 核兵器、3. 戦争、4. 線路、5. 暗号、6. 検索、7. モールビジネス、8. コンピュータ企業、9. ビジネスメーカー、10. ユビキタス・コンピューティング、11. 未来エネルギー、12. 政治、13. ニュース、14. マガジン、15. 風刺、16. 教育、17. 娯楽、18. 図書館、19. 公文

＊文教大学情報学部教授

書、20. 百科、21.利用統計（もちろん、この「参考ウェブサイト」リストは、本来、本書の各章を読んだ後に読者がさらに情報を探索してゆくためにつくられたものであり、各項目下には筆者によって厳選されたインターネットアドレス（URL）が列挙されている。なお、本文に含まれる、「インターネットの作法１～３」も、情報探索のこつを伝えるものとして有用である。）

筆者は、「知識を構成しているのは事実であり、事実はまさしく何を事実と認定し公認するかという闘争の結果成立するものである」（p. 227）と考える。そして、日本語の「情報」という言葉の軽さを、世界の人々にとっての「情報」が生死にかかわる重さをもつことに対比させて、我々の「情報」獲得に対する態度に再考を促している。好き嫌いではなく、知的な対話を世界の人々と行うこと、平和戦略には知的武装が必要であることを著者は説いている。

このように、グローバリゼーションとともに生じている巨大な変化を知り、知的戦略を練ってゆくためのヒントが、この本には多く含まれている。とはいえ、筆者の長年の取材と対話、探索の結果が、結晶のように豊富なアイディアとして本書にはちりばめられており、簡単に総括することができない。読み手によって、インスピレーションを与えられる箇所はさまざまであろう。（個人的には、たとえば「対話の文化と日本」の節（p. 45）は、短い文章ながら、大震災以降の広告の役割の変化を考える上で、大きな示唆を与えるものであった。）ぜひ本書を手にとって筆者の生の文章に触れていただきたい。